

テーブルを研究用に使用してゐるのを見て、其の便利なことを實見し、歸朝後、何とかして自分も一つ作つて見たいものだと思つてゐた。こんど田上天文臺を設備した中に、この回轉卓子を設計して見た。しかし、工事の都合上、五月の落成式の日間に合はなかつたのは遺憾であつたけれど、八月に入つてから、愈々この工作を始め、其の月の中旬の16日に出来上つた。其の翌日から第三研究室で毎日使用してゐる。

ピケリングの机は確か八角形であつたと思ふが、自分の研究室の大きさや、窓の都合等もあつて、六角形の設計をした。そして、全體の直径は2米とした。厚さ二寸の松板をつぎ合はせて作り、中心には10種の角柱を立てたもので、脚部にはボールベヤリングを入れたため、研究中に軽くまはり過ぎるほどである。六角形だから、6種類の仕事が同時に出来るわけであるし、其の一コマづつの卓も相當に廣くて、思つたよりも大きい面積である、この経験から見て、どうも八角形の必要はない、六角形で充分だと思ふ。とにかく、ハバード以外には例の無いもので、これにより、一つ田上の名物が増えたわけである。少くとも、今後、この種の卓子を設計製作される人の参考にはなると思ふ。——中央の柱のまはりに、卓と共に回轉する棚を、やはり六角形で作らせ、こゝには、ペンや、インキや、辭書や、水瓶などを載せてゐる。六方の卓は、書翰を書く部、計算する部、タイプする部、原稿を書く部、讀書する部、簡単な製圖の部といふ風に、今は使ひ分けしてゐるが、この區分は將來どう變るか、使つて見ないとわからない。此の頃は執筆に忙しくて、原稿も二三種のものが同時に進行中なものだから、實は此の六角回轉卓子のほか、もう二つ別の固定の卓子をも使つてゐる。これのため、卓だけでなく、椅子も回轉することにしてゐるが、便利である。

六角形の大卓子は非常に堅牢に出来てゐるので、研究室の隅や、手の届かない壁面の邊に置いてある書籍などを取るためには、この卓の上に乗つて、卓もろ共、舟を漕ぐやうにして、室内をまはるのだが、一寸、小兒らしい遊戯をしてゐるやうで、愉快である。

ピケリングの卓子は、餘りに大き過ぎて、殆んど室全體を占領してゐるやうな感じがあつたが、自分ののは、六角形であるために、研究室の約四分ノ一を占めてゐるに過ぎない。故に、一見して、室をせまくして了つたやうな感じは無い。設計の時は、室との釣り合ひ上、どんなものかと、多少心配してゐたが、出来上つて、實際使つて見ると、非常に便利で、研究上、萬事好都合であることが知れた。これなら、他の人々にも薦められると思ふ。(1942—9—10)

**宇野良雄氏** (本會理事) は先般應召さる。御武運を祈る。

## 一つの疑問

山本一清先生

拜啓（前略）下の件につき、御高見を伺ひ上げます。某俳句雑誌に、萬葉集の柿本人麿の歌

“ひんがしの 野に かぎろひの 立つ見えて  
かへりみ すれば 月 傾きぬ”

の中に“かぎろひ”を、一俳人の研究によりて、黄道光ならんと言ひ、萬葉學者も此の説を妥當と認めたる由、記載して居ります。

拙者“言海”等にて調べたるに、“かぎろひ”の意味には、黄道光等の意は之れ無く、且つ、“月傾きぬ”とあつて、夜明けの時刻より考へ、17日頃の月のことなれば、歌人が天文研究家でもない限り、黄道光は、月光に妨げられて、到底見ること能はざるべく、たとへ見えたとしても、歌興を催すほどの美觀には非ざるべしとの理由によりて、該雑誌所載の説は當らずと存じます。（下略）

八月13日

尾道市にて 松本 義一

この手紙を読んで、これは面白い問題だと思つたが、念のため、野尻氏の意見を伺つたところ、それに對して、次ぎの如き返書を受けた：

山本一清様

拜啓（前略）私もこの松本氏の御意見に賛成であります。守部の解釋“かぎろひとは旭日の餘光をいへるなり”といふ屢々引用される註が、その時の大體の月齡から考へても、最もうなづけることと思ひます。なまじ黄道光などの新知識が、行き過ぎた解釋を案出させたのでありませう。かのルバイヤトの“偽りのしのめ”などは、正しく黄道光でありませうが、“かぎろひ”といふ相當印象のあざやかな語からも、黄道光とするのは無理と思ひます。（後略）

八月27日

野尻 抱影

“かぎろひ”といふ言葉が此の場合のみに用ゐられてゐるのならば、尙、いろいろ考究の餘地があるかも知れないが、他にも白晝の現象として此の言葉が昔から用ゐられてゐるのであるから、この疑問は餘り深く詮索する必要がないやうにも思ふ。（山本）

高城武夫氏（本會理事）は去る九月9日、大阪を出發、北海道へ出張、同26日歸阪された。この出張の目的は來年二月5日の皆既日蝕觀測地を調査するためであつた由。

H $\alpha$	(強度 9)	N <sub>1</sub>	(強度10)	$\lambda$ 4686 HeII	(強度 1)
H $\beta$	(// 3)	N <sub>2</sub>	(強度 8)	$\lambda$ 4634~4640NIII	(強度 2)
H $\gamma$	(// 3)	$\lambda$ 4363[OIII]	(// 3)	$\lambda$ 4076	SIII (// 0)
H $\delta$ +NeIII	(// 1)	$\lambda$ 5755.0[NII]	(// 2)		

新星にはよくある例の通り、極光線  $\lambda$ 4363は星霧線 N<sub>1</sub> 及 N<sub>2</sub> よりも弱い、Sanford 氏は N<sub>1</sub> 線や N<sub>2</sub> 線の全幅を毎秒2100軒と見たが、Swings 氏等は1730軒と見た。[A. S. P. 311]

**太陽のスペクトル中のバルマ線**

セント・ジョン氏が出版したロランダの太陽スペクトル波長改正表では、明瞭な水素バルマ線の極限は H $\epsilon$  であつて、H $\zeta$  以下は皆非常に怪しいとされてゐる。しかし、數年前、H. D. Babcock 氏はシーイングの良い時を狙つて H $\zeta$  から H $\nu$  までを認めた。近頃、M. Minnaert, G. F. W. Mulders, J. Houtgast 三氏の出版した Photometric Atlas of the Solar Spectrum (Utrecht, 1940年)の研究によつて、H12 (=H $\kappa$ ) から H17 までの線が確認された。色球のスペクトルでは、バルマ線は輝線として、S. A. Mitchell 氏により H37 まで認められてゐる。[Ap. J. 71, 16 (1930)].

この太陽光球中のスペクトルに見えるバルマ線のうち H $\zeta$  (=H8) から H17 までの詳細な性質が Mulders 氏によつて發表されてゐる [A. S. P. 311]。H18 以下は全く見えない。之れは、要するに、各線の中央部の強さが漸次が増えて来るのによる。

**エロスの観測から太陽の視差**

1930~1931年のエロス小遊星の接近期に於ける寫眞観測から、アレゲ=天文臺の N. E. Wagman 氏は、太陽視差の計算値を發表した。[“Observations of Eros, 1930~1931”, Alleg. Pub. 8 (1940)] これによると、視差は8."797 $\pm$ 0."004である。

尙、子午線の附近で撮影されたエロスの寫眞から、月の質量が算出された。その結果は、地球の質量の (81.28 $\pm$ 0.011) 分ノ一である。

この數値と、=ウカム氏の歳差恒數 50."3708 とから、章動恒數として9."223が算出され、又、地球の形の力學的精率は 0.003271 と算定された。[A. S. P. 311]

因みに、エロスの観測結果を全世界から集めて、総合的に研究したものは、既に天界 248 號にスペンサ・ジョンズ氏の發表されたものを紹介したから、見て頂きたい。

**急告**： 去る九月19日パロマ山のツキキ氏は白鳥座 $\gamma$ 星の西2度に8等級の新星を發見した由、コペンハーゲンより入電(急報参照)。